の配列に近似している。

ヨーロッパの *R. alpina* もこれに似た構造をもつ。

6. *Rhamnus costata*

外部形状 (Fig. 10)：表面黒かっ色，かっ色を呈し，卵円形，倒卵形で高さ 0.5〜0.8 cm，径 0.5〜0.8cm で 2.5〜3.5cm の長い果柄を有す。他の形状及びルーペ視については前述各種と近似している。

内部構造 (Fig. 11)：最外層よりクチクラ層，表皮細胞，厚角組織，柔組織と続く外果皮，中果皮層はクロウメモドキ群に近似しているが内果皮層は 25〜40μ で 2〜5 層，全て厚膜繊維よりなり，繊維は長さ 170〜1100μ で多くは 600〜800μ である。又種皮の石細胞も大きくその他構造，細胞内含有物等クロウメモドキ群に近似するものである。

□沼田　真 (ed.) **帰化植物**　pp. 160　大日本図書株式会社，東京 ¥800 (1975, X)
沼田　真：帰化植物の生態学的特性，飯泉　茂：帰化率・林　一六：帰化植物の種子と発芽，長田武正：帰化植物の種類調べの 4 篇から成っていて，適当な一般的読物である。沼田は帰化植物の定義を述べ，その生物学的特性にふれ，他感作用（アレロパシー）に力を入れている。飯泉は全国各地の帰化率をひろく引用しているが，蔵王のスキーゲレンデでの 58パーセントは驚くべき比率である。肝心の帰化率の記述がまぎらわしいのは問題である。林は帰化植物の定着に及ぼす立地到達力と，立地占有力との見方から，種子を論じている。菊科の果実を種子とすることには一寸注意がほしかった。武田はがらりとかわって，巧みな挿図を使って，主にキク科の数種を解説している。よく似た種の適切な区別点を挙げたのがよい。肩のこらない雑草論として一読の価値がある。（前川文夫）

□Barbara Everard: **World of flowers**　30 in. × 40 in. John Bartholomew & Son Ltd, Edinburgh (1975) 50p　Everard 女史が健筆をふるった，世界の特徴的な植物の一枚画絵であって，中央に世界地図をやや小さく描き，周囲に北米，欧州，地中海，熱帯及中央アフリカ，中南米，濠州，東南アジア，ヒマラヤ及支那，南アフリカ，北極，南極に分けて夫々の地区の代表的な植物 160 種を描いて，一目でわかるようにした。その画は同女史の著 Wild flowers of the world (1970) からとっている。世界地図上にソメイヨシノを描いたのはどうも少々まずいが，一目して世界の植物がわかるところが味噌である。地図専門店が一転して出版したのは面白い。英名と学名とを附記したのは便利。なお一般頒布用もあるという。一部 1,000 円（前川文夫）